百代の過客

日記にみる日本人

ドナルド・キーン
金関寿夫訳

朝日新聞社

百代の過客　日記にみる日本人

一九八四年一二月一〇日第一刷発行
一九八五年　三　月一五日第三刷発行

著者　ドナルド・キーン
訳者　金関寿夫

装画　牧　進／装幀　多田　進
発行者　川口信行／印刷所　共同印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
〒104　東京都中央区築地五の三の二
電話　〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇―一七三〇
定価　三五〇〇円

© D. Keene 1984 Printed in Japan ISBN 4-02-255277-8

愛蔵版のために

日本人がつけた日記について連載を書こうと思っていた頃、平安朝の宮廷女性の日記や芭蕉の紀行文または明治時代の文学者の日記を中心にしようと考えていた。しかし、書き始めてから日本人の日記全般についての研究がないことに気がつき、平安初期から現代までの日記を通して日本人を見たら、ユニークな展望が与えられるかも知れないと思った。そこで一応『土佐日記』から永井荷風の日記までのアウトラインを作ったが、平安朝や江戸時代や近代と比較して中世の日記は少なかった。これは止むを得ないと思っていたが、中世の日記を充分調べていない証拠であることが後で分かった。

原稿を書き出してからもう一つの発見をした。以前からよく知っていた日記——例えば『土佐日記』『紫式部日記』または芭蕉の紀行文——について書くよりも、以前に一度も読んだことがない日記の方が書き易かった。著名な文学作品という評判がなくても、印象が新鮮であったため、私が探し求めていた日本人論の手がかりが潜んでいた。数多くの無名の日記

に面白さが発見できたことは、何よりの喜びであった。勿論、明治以前のすべての日記に触れることはできなかった。平安期の公卿が漢文でつけた日記は、僅か二、三しかあげられず、昔から愛読してきた小林一茶の日記も、幕末の日記の流れにうまく入らないので、割愛せざるを得なかった。

にもかかわらず、『百代の過客』は当初計画したより長びいてしまった。朝日新聞に一九八三年七月四日から連載を始めたが、百二十回予定の原稿が百八十五回になっても近代に到達できなかったことを申し訳なく思っている。機会があれば続篇を書きたいと思う。

『百代の過客』が新聞に連載されている時から、読者の一部から「何故日本語で書かないか」という旨の手紙があった。正直に言って、このような批判をありがたく思う。何故なら、外人は日本語を書けないと思うような日本人より、日本語で書くべきだと叱って下さる読者は、私の学識を認めてくれるからである。

いつか朝日新聞に、英語で書いた理由について次の三つをあげた。第一は、学問的に深い内容を長期に連載するには、母国語の方が書きやすいこと。第二には、外国人ならではの視点を打ち出す目的があり、日本語で書くとどうしても日本的な表現や言い回しになって、英語で書いたときと微妙に違ってくる。第三は、金関寿夫氏という心強い翻訳者がいたことである。以上の見解は現在でも変わっていない。

ここで、半年以上もやりにくい仕事をみごとになし遂げて下さった金関さんに、もう一度

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

御礼を申し上げたい。

今まで私が書いた本の発行に際して、互いに矛盾する二つの期待があった。第一はなるべく多くの人に読んで貰いたかったので、たとえ体裁の美を犠牲にしても買い易い本にしたいということであった。もう一つは、美しい本の愛好者として、幾分か高くなっても自分の新しい本が綺麗なものであってほしいという期待である。

二者択一に迷ったことがあるが、最終的にいつも廉価本を選んだ。が、本屋で数々の華やかな本の中に自分の質素な本を見つけて、綺麗な本を断念したことを後悔したことがある。だが今度は違う。『百代の過客』は廉価な選書版が出てから、この愛蔵版が発行されることになった。二つの相矛盾する期待が叶ったという望外の喜びがある。

図書編集室の初山有恒、山田淳夫、河津小苗三氏が大変な熱意を見せ、私の夢を実現させて下さった。この場であつく御礼申し上げる次第である。

一九八四年十二月

ドナルド・キーン

目次

愛蔵版のために

序　日本人の日記　3

I　平安時代　21

入唐求法巡礼行記　23

土佐日記　28

蜻蛉日記　36

御堂関白記　50

和泉式部日記　53

紫式部日記　58

更級日記　73

多武峰少将物語　87
成尋阿闍梨母集　93
讃岐典侍日記　101
中右記　112
家集と歌物語　117

II
鎌倉時代　121

建礼門院右京大夫集　123
たまきはる　138
明月記　146
源家長日記　158
いほぬし　166
高倉院厳島御幸記　171
高倉院昇霞記　176

海道記　179
信生法師日記　189
東関紀行　194
うたたね　197
十六夜日記　208
飛鳥井雅有日記　213
弁内侍日記　218
中務内侍日記　224
とはずがたり　233
竹むきが記　246

Ⅲ 室町時代　261

大神宮参詣記　266
都のつと　273

小島の口すさみ 276
住吉詣 282
鹿苑院殿厳島詣記 285
なぐさめ草 288
富士紀行 296
善光寺紀行 299
藤河の記 302
廻国雑記 310
白河紀行 314
筑紫道記 322
宗祇終焉記 328
宇津山記 334
宗長手記 340
東国紀行 346

吉野詣記　349
富士見道記　355
玄与日記　361
幽斎旅日記　364
九州の道の記　367
高麗日記　371

IV 徳川時代　375

戴恩記　380
丙辰紀行　389
近世初期宮廷人の日記　394
遠江守政一紀行　397
東めぐり　400
丁未旅行記　403

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

野ざらし紀行 408
鹿島詣 417
笈の小文 420
更科紀行 427
奥の細道 430
嵯峨日記 442
西北紀行 446
東海紀行 451
帰家日記 457
庚子道の記 461
伊香保の道行きぶり 467
風流使者記 470
蝶之遊 476
長崎行役日記 484

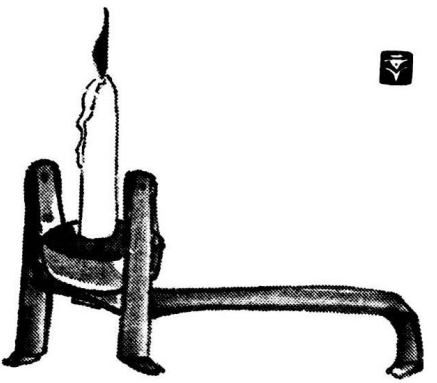
江漢西遊日記　490
改元紀行　498
馬琴日記　504
井関隆子日記　512
浦賀日記　521
長崎日記　524
下田日記　530
終わりに　533
参考書目録　536
索引

見返し
『奥の細道』　天理図書館蔵
『滝沢馬琴日記』　早稲田大学図書館蔵
『土佐日記』　韓経閣文庫蔵
『明月記』　天理図書館蔵

百代の過客

日記にみる日本人

序　日本人の日記



此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com